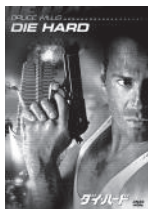


わが愛すべき 80年代映画論 (第五回)

文章：かつお



『ダイ・ハード (原題：Die Hard) 1988年』

DVD発売中 ￥1,419＋税

ブルーレイ発売中 ￥2,381＋税

20世紀フォックス ホーム エンターテイメント ジャパン

監督：ジョン・マクティアナン

主演：ブルース・ウィリス

アベンジャーズだかジャスティスリーグだかの最近のヒーロー映画を、アクション映画とは呼ばない。異星人や神や金持ちなど雑多なスーパーヒーローとそれに対抗し得るスーパーヴィランとの戦いは、一体双方にどんな技があり、どこまでやれば死ぬのかが全く分からない。全力で「ちゅどーん」とビームを放っても余裕で生きていたり、そうかと思えば肉弾戦であっさりくたばったりする。要するに「どこまでやれば限界か」が観客に全く分からない中で行われる戦いには、緊張感もスリルもないのである。『ダイ・ハード』はまさにその反対を行く映画である。生身の人間である主人公の限界、痛みが観客の痛覚に訴えるからこそ、その勇気もスリルも観ている人間の心に刺さるのである。

ストーリーはクリスマス休暇でLAの妻の会社、ナカトミ商事を訪れたNY警官のジョン・マクレーン（ブルース・ウィリス）が、ビルを閉鎖し、30人もの社員を人質にとって多額の財産を強奪しようとするテロリストを一人一人やつつけていく物語である。

「ああ、あの強すぎる主人公が合気道でテロリストをボコボコにするシリーズ*1でしょ？」と勘違いする向きもあるかもしれないが、そうした数多あるアクション映画と一線を画す要素が本作にはある。

まず一つが、全編にわたり、ビル*2の中という極めてクローズドな環境で全てのアクションが行われること。逃げ場がない中で戦うために、肉体の強さや武器の数、仲間の数は役に立たない。どう切り抜けていくかが問われるのだ。

そしてもう一つがマクレーンを襲う「これでもか」というくらいの不運の数々。だいたい映画の冒頭、LAに到着する飛行機の中で、隣の男が話す「飛行機酔いを解消するには、カーペットの上で裸足になるのがいい」というフレンドリーアドバイスからして、1時間半後に襲う、痛すぎる不運の伏線になっているという不運ぶり。

そうした制約条件と不運の中で奮闘するスーパーコップでもない普通の警官ジョン・マクレーン。彼の唯一の武器、それは「機転」だ。次から次に襲い掛かる不利な状況に、観客の予想を超える「機転」を利かせて切り抜けていく。

そして「ぼやき」。生身の警官でしかないマクレーンのぼやきが、観客の心をつかんで離さない。刑事のぼやき、と聞けば、「タカ、俺から逃れた奴はいないぜ。女を除いてね。」「そんなこと言っていると、ユージ。お前のハートを撃ち抜かれるぜ。」

とかいうデカのぼやきを想像するかもしれないが、そうしたトレンドイ要素は本作には一切ない。また、何もかもが軽い今のくだらない若者で

* 1) そう。決して関連性は無いにも関わらず、『沈黙シリーズ』として強引に整理されているアレである。

* 2) DVD表紙画像参照

あれば、インスタやツイッターで「いま39階にいてテロリストに囲まれてます！」パシャ、とでも自撮りをアップしそうなものだが、この時代はやはり無線である。武骨な「ガー、ピー」音に続き悲惨な状況をつぶやくマクレーンの弱さが、観客の心を打つ。

そして最後に、その主人公を取り巻くキャラクターも光りまくっている。

- ・「100万ドルの交渉もしてきたんだ。テロリストとの交渉なんて朝飯前だ。」と言って無謀にも交渉役を買って出て、敢え無くマクレーンの秘密だけバラして殺される残念な商社マン。
- ・ドーナツが大好きな気のやさしい太った黒人警官。
- ・現場を仕切ると言いながら失敗ばかりする官僚的な地元警部と、上から目線でそいつから現場指揮権を取り上げた方がいいが、自信過剰すぎてほぼ何もできずに失敗するFBI。
- ・マクレーンの家族まで取材に行き、ますますマクレーンを窮地に追い込むテレビレポーター。
- ・『人質とテロリスト、テロリストと人質』という意味不明な本の著者で専門家を自認し、「ヘルシンキ症候群」を解説するはいいが役に立たない博士と、「ヘルシンキ」と聞いた瞬間に「スウェーデンのね」と合の手を入れて「フィンランドだ」とすぐに訂正されアホを晒すニュースキャスター。

よく見れば魅惑の「ステレオタイプさん」たちの乱れ打ち。絶望と機転の連鎖が起こるビルの回りで、こうしたステレオタイプさんたちの登場が観客にとって一服の清涼剤となる。他の余計な要素を持ち込まない脚本の秀逸さが際立っていると言える。

制約された条件の中で、一番悲惨な状況を想定し、典型的な言葉をまわりに散りばめながら、「機転」を利かせて切り抜ける。よく見てみれば、想定問答の作成に必要な要素の全てが、本作に詰まっていることは言うまでもない。

最後に流れるダイ・ハードシリーズお約束、ヴォーン・モンローの「Let it snow! Let it snow! Let it snow!」が、本作が最高のクリスマス映画

であることを示している。これを読む若い官僚諸君は、是非クリスマス休暇に本作を鑑賞し、来べき国会審議に向け想定技術を磨いてもらいたいものである。